令和6年3月1日発行（毎月1回1日発行）第54巻第3号 通巻570号 昭和56年8月17日 第三種郵便物認可

吟剣詩舞

ginkenshibu

日本財団助成事業
昨年に続き日本財団 笹川陽平会長ご臨席のうえで
第3回宗家・会長会議開催

YouTubeチャンネルで和楽器バンド鈴華ゆう子さんが吟剣詩舞の番組を生配信！

鈴華ゆう子の和風喫茶 吟剣詩舞

表紙の詩

重ねて楓橋に宿す　張継

白髪重ねて来る一夢の中
青山改まらず旧時の容
烏啼き月落つ寒山寺
枕を敧てて猶お聴く半夜の鐘

3
令和6年
睦月

昨年に続き日本財団笹川陽平会長ご臨席のうえで第3回宗家・会長会議開催

吟剣詩舞界の活性化目指し全員が意見発表

日本財団助成事業

日時：令和6年1月18日（木）
場所：東京・日本財団第1～第4会議室

全国の各流派宗家・会長に日本吟剣詩舞振興会の活動内容を理解していただくとともに、平素直面している課題について話し合っていただこうと、日本財団ビルにて「第3回宗家・会長会議」が開催されました。今回は全員に意見を述べていただくために、参加者の人数を第1回より半分以下に絞って実施。日本財団の笹川陽平会長も壇上に立って挨拶、各宗家・会長がそれぞれの意見を述べるとともに、その対応策など活発な論議が交わされました。

「第1回宗家・会長会議」では55人が参加したが、今回は半数以下の24人に絞り込み、全員が十分な時間を使って吟剣詩舞界の課題と未来について意見を述べた

前方には日本吟剣詩舞振興会の沼崎富会長、池内賢二専務理事、徳田寿風副会長、早淵鯉將副会長が着席。意見の内容はすぐに左側のモニターに表示された

世の中の変化に対応し愛好者を増やしてほしい

日本財団笹川陽平会長

「人口の減少によりすべての経済活動を含め停滞していく中で、日本精神の発露である吟剣詩舞道が活躍するということは、日本国の基本に関わる大きな問題です。もう一度日本武道館で大会を行うというように、高い目標を持って努力することが発展につながります。変化のないところに発展なし、と言います。吟剣詩舞道の精神を堅持しつつも、いかに世の中の変化に対応し、一人でも多くの愛好者を増やしていくか、ぜひそれぞれの立場から発言していただき、皆様方の後に続く多くの人たちに方向性を示してください。日本財団としましては、そのためにいかなることについても支援することをお約束いたします」

日本吟剣詩舞振興会が取り組んでいる改革・改善の方向性について理解していただき、吟剣詩舞の将来ビジョンを共有することを目標に、令和2年1月に開催された「第1回宗家・会長会議」。同振興会の基となる全国346（当時）の流派から55人の宗家・会長が笹川記念会館に集い、意見交換が行われました。

その後コロナ禍に見舞われ、第2回が開催されたのは3年後の昨年1月18日。日本財団ビルに場所を移し、31人の宗家・会長が参加しましたが、ちょうど1年後に第3回の開催となりました。

北海道から九州まで全国の宗家・会長が集まったなか、会議の冒頭で挨拶する沼崎富会長。第1回、第2回での反省をふまえて人数を絞ったと説明した

中部地区の飯田報信会長が持参した静岡県主催による「富士山漢詩コンテスト」の作品集。振興会主催によりこうしたイベントができないかと提案した

第1回では事務局からの説明が長く、人数も多くて参加者の発言の機会が少なかったことから、今回は各地区連絡協議会を通して24人が参加。最初に挨拶に立った同振興会沼崎富会長も能登半島地震と飛行機事故について言及した後、「今回はお二人の時間をできる限り多くとり、内容の濃い話し合いにしていきたいと考えております」と述べました。

続いて昨年に続き日本財団笹川陽平会長が壇上に立ち、能登半島地震において日本財団のボランティアがいち早く活動した事例を紹介するとともに、「今のお立場から素直なお話をしていただき、素晴らしい会議になることを祈念いたします」と挨拶しました（3ページ参照）。

酒井南賜会長の疑問（左ページ参照）に応える形で、詩吟教室の開催告知をどのように行ったか説明する東日本地区の細谷龍直会長

続いて池内賢二専務理事が開催趣旨として「現在株価が戻ってきていますが、株の世界では『夜明け前が一番暗い』と言います。危機感は大事だけれど、投げ出さずに現状を受け入れて前向きに頑張ることが大切だと思います」と趣旨を説明しました。

活発な論議も交わされた「意見交換」

そして本題である「意見交換」が開始されます。まず大田直樹事務局長が「お越しいただいた皆様全員が一度はご発言いただけるようにと考えています。発言内容は正面に据えられたモニターに表示されるのでぜひご覧いただきたい」と説明。各地区連協代表の宗家・会長が、ひとりずつ事前にまとめた意見を発表していきます。

日本財団笹川陽平会長、日本吟剣詩舞振興会役員とともに、各地区連協から推薦された宗家・会長24人が、会議に先立って行われた記念撮影に収まった

最初に指名された四国地区の瑞鳳流日本吟詠会の藤村瑞宝会長は小学校での授業で吟詠を教えた経験について語り、振興会で学校に働きかけることはできないかと提案しました（「意見交換」での意見参照）。

そのようにして次々に宗家・会長が発言。疑問について役員や他の宗家・会長が答える場面もあり、活発な意見交換がなされました。終了予定時刻の17時にちょうど24人全員が意見を述べ終わり、徳田寿風副会長が閉会の辞。

「皆様方が日頃抱えておられる問題をお聞きし、その解決方法まで発表してくださる方もいらっしゃいまして、本当にこの会が実り多いものであったと思います。財団も皆様方よりいただきました貴重なご意見を大切に受け止め、対処していく所存です」と述べて3時間にわたる会議が終了。その後の懇親会でもさらに打ち解けた雰囲気の中で意見を交わす姿も見られ、過去2回を上回る有意義なイベントとなりました。

「意見交換」での各宗家・会長の意見

愛知県の酒井南賜宗家。小学校で10年以上詩吟を教えていたが、先生が熱心でないとできなくなってしまうと発言。「無料体験の教室を開かれたという先生にその方法をお聞きしたい」ということで、東日本から参加の細谷龍直会長が回答した

今年全国高校総合文化祭が開催される岐阜県の後藤娟桜会長。「今年高校生になる子がいるが、昨年出場していないと出られないと聞いた。高校の部活動に入ればいいらしいが確認できますか」と発言。大田事務局長が高校文化連盟等に確認すると回答

福岡県の笠井栄俊会長。「スーパーチームは高い評価を受けているが、たとえば福岡だけで、年齢も関係ないチームを作って地元のショッピングセンターなどで公演ができないか」と発言。実際に場所は貸してもらえるもののまだ実現していないとのこと

「意見交換」で最初に発言した藤村瑞宝会長（徳島県）。千人近いマンモス小学校で邦楽の時間に詩吟を教えたが、現在は生徒数も400人くらいになって教える機会もなし。財団のほうで学校に働きかけて、教育を通して詩吟を広められないかと提案